第II章　教師の修学旅行観

永井　聖二　　群馬大学助教授
三枝　惠子　　埼玉県立小川高校教諭

1．サンプル校の概要

1）修学旅行担当者のプロフィール

まず、サンプルの構成を示しておこう。**表**II－1は今回全国調査した学校の修学旅行担当者のプロフィールである。女性教師が12.2％とやや少なめであるが、担任は44.9％、教職経験では11～30年の経験の先生方が57.3％を占めている。修学旅行の担当者になるためには、一度は修学旅行の引率を経験したほうがよいだろうし、担任、担任外の割合もほぼ半数を占めている。また、サンプルの抽出方法は全県のバランスを考え、3,000校を選び郵送した。調査校が日本の中学校の縮図であるとは言い切れないが、サンプルの構成からみて、修学旅行を担当しているかなりの先生方の意見が述べられていると考えることは可能ではないか。

（表II－1）サンプルの属性

（％）

性　別	1．男　性	87.8	2．女　性	12.2
担　任	1．担任している	44.9		
	2．担任していない	55.1		
教職経験	1．1～5年	8.9		
	2．6～10年	17.0		
	3．11～20年	24.5		
	4．21～30年	32.8		
	5．31年以上	16.8		
教　科	1．国　語	10.8	6．音　楽	2.6
	2．社　会	21.5	7．美　術	4.8
	3．数　学	13.3	8．体　育	9.6
	4．理　科	18.8	9．技　術・家庭科	8.3
	5．英　語	10.3		

2）修学旅行の実態

私たちがイメージする修学旅行とは、京都・奈良方面に１～２泊し、名所･旧跡･寺院などをかけめぐり、大部屋で遅くまで教師の目を盗んで話をしたり、まくらを投げあったりして楽しんでいたように思う。そして、翌日のバスの中では、ほとんどの生徒が眠ってしまい、熱心に説明するガイドさんをあきれさせたようにも思う。また、食事は全般においしくなかったが、家族と離れて友だちと寝食を共にすることや見知らぬ土地を訪ねることは、中学時代の印象深い思い出として私たちの心の中に鮮やかに残っているように思う。

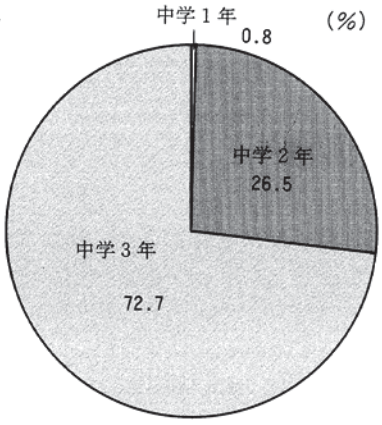
しかし、現在交通機関も発達し、東京から京都・奈良は日帰りできる地域となった。家族で旅行する機会も増え、国内ばかりでなく外国へも出かける子どもも少なくなくなった。また、歴史書や絵ハガキの中だけで知識を求めていた神秘的な名所・旧跡・寺院の情報はテレビや雑誌を通し、日常的に私たちにもたらされるようになった。このような時代の中学生の修学旅行の意義は、かつての修学旅行の意義と異なって大きく変化しているものと考えられないだろうか。

そこで平成元年度実施された修学旅行の全体像を明らかにするため、実施時期・日程・１人当たりの費用およびおこづかい・利用した交通機関・修学旅行の計画および事前準備について、それぞれみていくことにしたい。

図Ⅱ－１は修学旅行の実施時期を示したものである。中学３年生で72.7％の修学旅行が実施されている。**表Ⅱ－２**より実施月は５月に多く、約半数の中学校で５月に修学旅行を行っていることがわかる。日程については、**図Ⅱ－２**で示したように２泊３日が５割を占めている。

では、家庭におよぼす経済的負担はどの程度であろうか。**表Ⅱ－３**は生徒１人当たりの旅行の負担額を示したものである。４万円台が35.9％、３万～５万円の負担額は全体の約７割強となっている。おこづかいの額では、１万円～１万5,000円未満が33.6％、約８割の中学生は5,000円～１万5,000円未満のおこづかいを持ち、おみやげや記念品にあてているようである（**表Ⅱ－４**）。

（図Ⅱ－１）実施時期



次に、利用した交通機関では、バス95.1%、ＪＲ一般列車47.0%、ＪＲ専用列車35.8%、フェリー31.0%の順となっている(**表Ⅱ－5**)。したがって、平成元年度の中学生の修学旅行は２泊３日で３年生の５月に実施され、費用負担額はおこづかいも入れて６万円くらいというのが、修学旅行のパターンのようである。

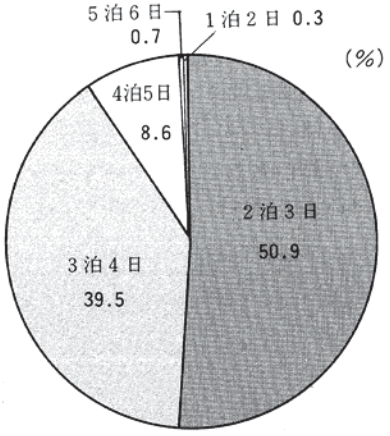
修学旅行の計画は**表Ⅱ－6**により２年生の１～２学期（44.8%）から教師が計画をたて、生徒への事前準備は２年生の２～３学期（49.4%）から取り組みはじめるようである（**表Ⅱ－7**）。

（表Ⅱ－2）実施時期（月）

（%）

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
0.0	1.0	1.0	20.3	46.2	10.3	0.6	0.3	7.1	9.3	3.6	0.3

（図Ⅱ－2）日　程



（表Ⅱ－3）生徒１人当たりの費用

（%）

1万円未満	1万円～	2万円～	3万円～	4万円～	5万円～	6万円～	7万円以上
0.7	0.3	3.0	18.6	35.9	19.5	11.8	10.2

74.0

（表Ⅱ－４）生徒１人当たりのおこづかい

（%）

5000円未満	5000円～	7500円～	１万円～	１万5000円～	２万円以上
2.7	32.7	16.1	33.6	6.7	8.2

82.4

（表Ⅱ－５）利用した交通機関

（%）

バ　　ス	95.1
ＪＲ一般列車	47.0
ＪＲ専用列車	35.8
フェリー	31.0
タクシー	6.7
飛 行 機	3.4

（複数回答）

（表Ⅱ－６）修学旅行の計画はいつ頃から

（%）

１年生の１学期	１年生の２学期	１年生の３学期	２年生の１学期	２年生の２学期	２年生の３学期	３年生の１学期以降
8.5	13.9	11.6	21.5	23.3	16.4	4.8

（表Ⅱ－７）修学旅行の事前準備はいつ頃から

（%）

１年生の頃から	２年生の１学期	２年生の２学期	２年生の３学期	３年生の１学期	直　　前
5.2	18.9	18.2	31.2	23.9	2.6

2．修学旅行の意義

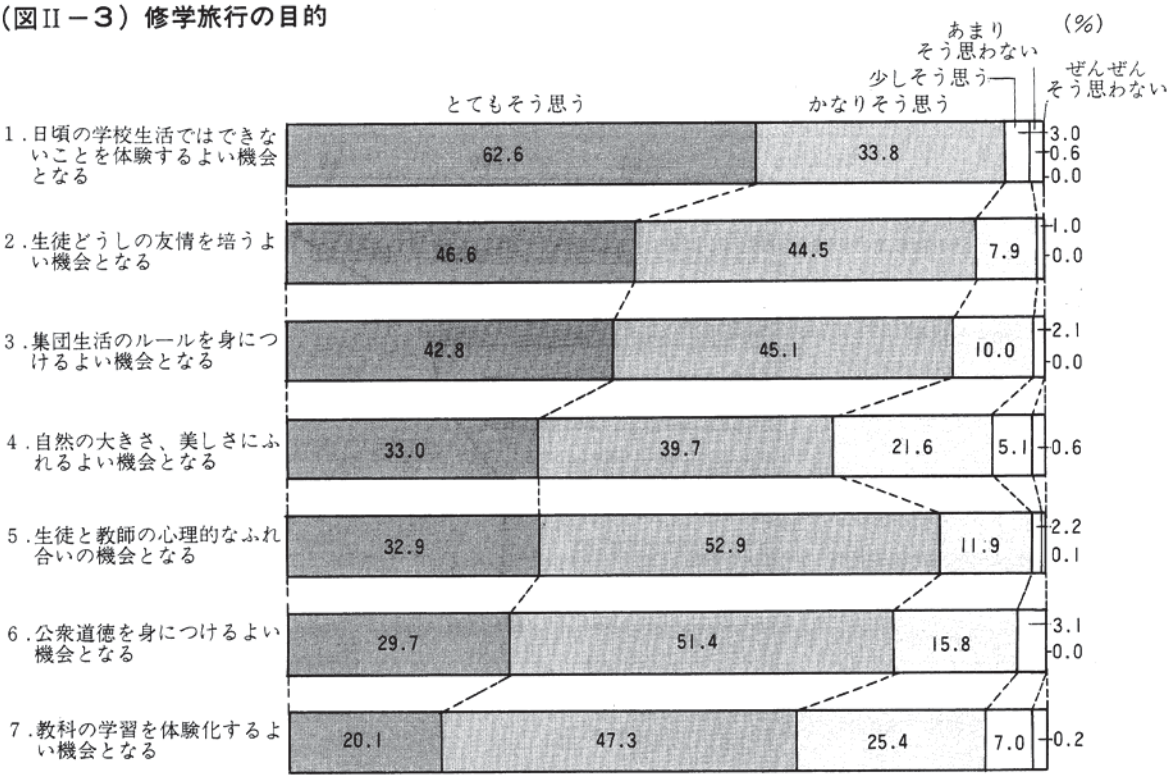
これまでの中で、日本各地の平成元年度の修学旅行の行われている様子が明らかになってきた。日程・コースも含め、それぞれの学校でさまざまな教育的配慮のもとで実施されていると思われる。ここでは、修学旅行の目的や生徒たちにとって修学旅行とはどのような意義を持っているのかを明らかにしていきたい。

1）修学旅行の目的とは

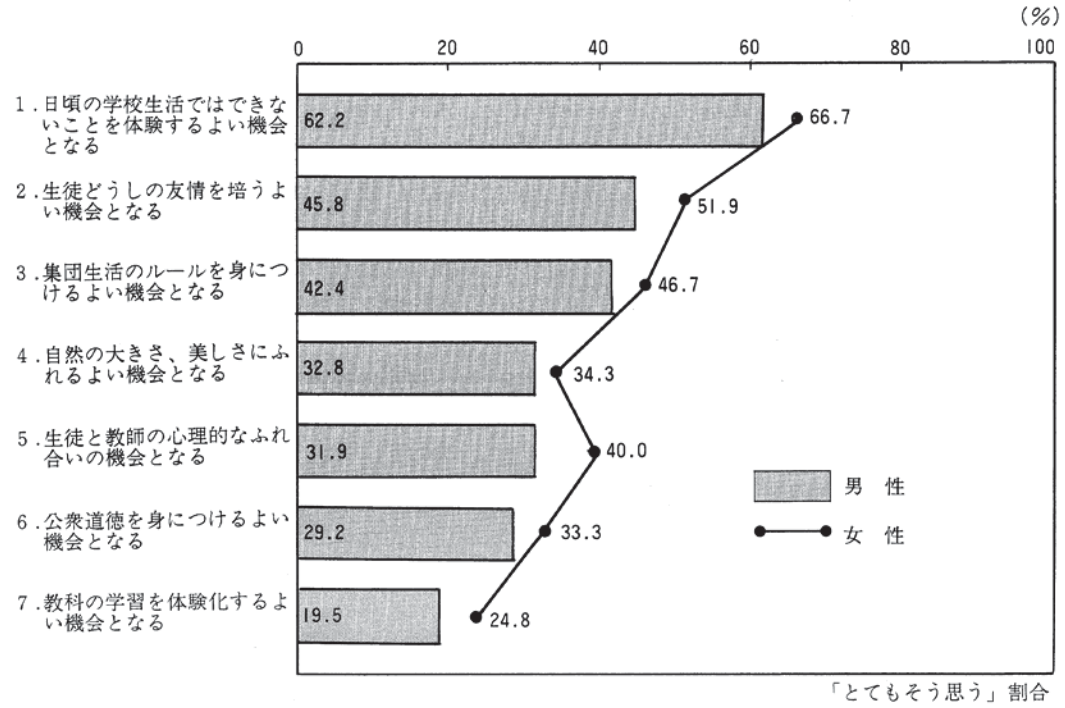
修学旅行の目的は社会における価値観と密接に関連している。例えば、国の文化中心地や重要地を見聞きする体験の重視、集団行動の重視、勤労体験の重視、勤労生産奉仕的行事の重視と時代によってさまざまである。

図II－3は、教師が考える修学旅行の目的をみたものである。日頃学校生活ではできないことの体験の場として、生徒どうしのふれ合いの場としての期待が大きい。一方、道徳心を養う場や教科の学習の体験の場といった項目はあまり期待していないようである。**図II－4**は、修学旅行の目的を教師の性別でみたものである。全体的に女性教師の修学旅行に対する期待は、男性教師よりもやや高い傾向がみられる。それでは担任の場合はどうであろうか。**図II－5**によると、担任している場合は、担任外の教師よりも修学旅行に対する期待がやや低いようである。担任であれば、クラスの仲間集団のよきふれ合いも、集団生活のルールも常日頃の指導の重点であり、むしろ修学旅行の前までに一応の集団としてのまとまりを作っておきたいものである。それ故に2泊3日の旅行では担任外教師ほど期待が抱けないのかもしれない。

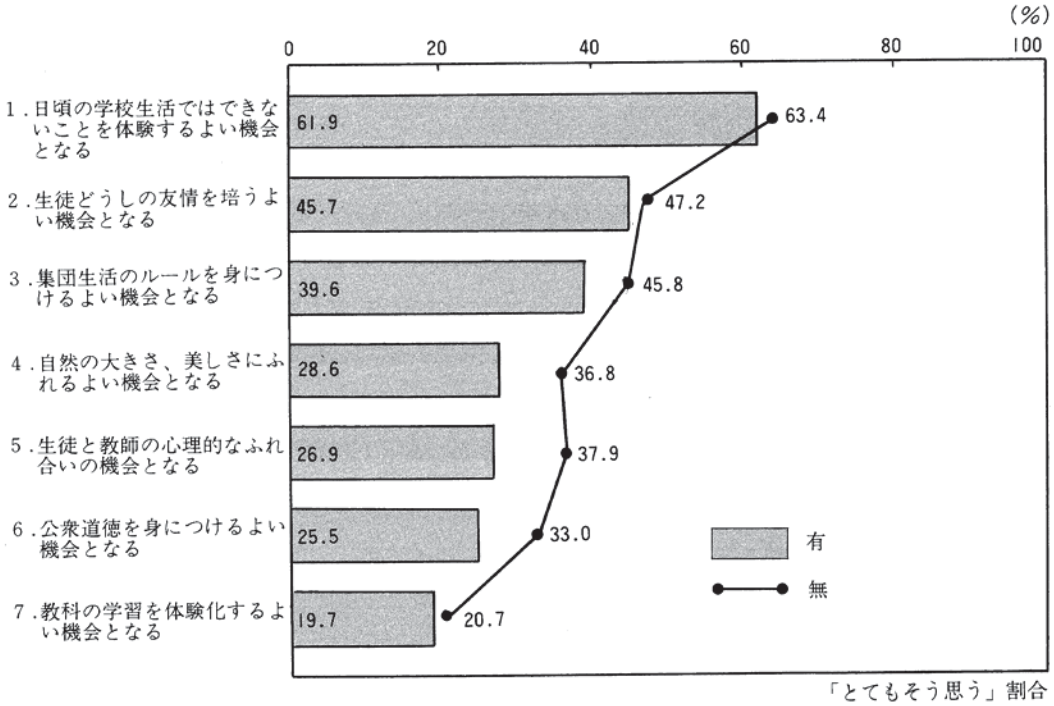
（図II－３）修学旅行の目的



（図II－４）修学旅行の目的×性別



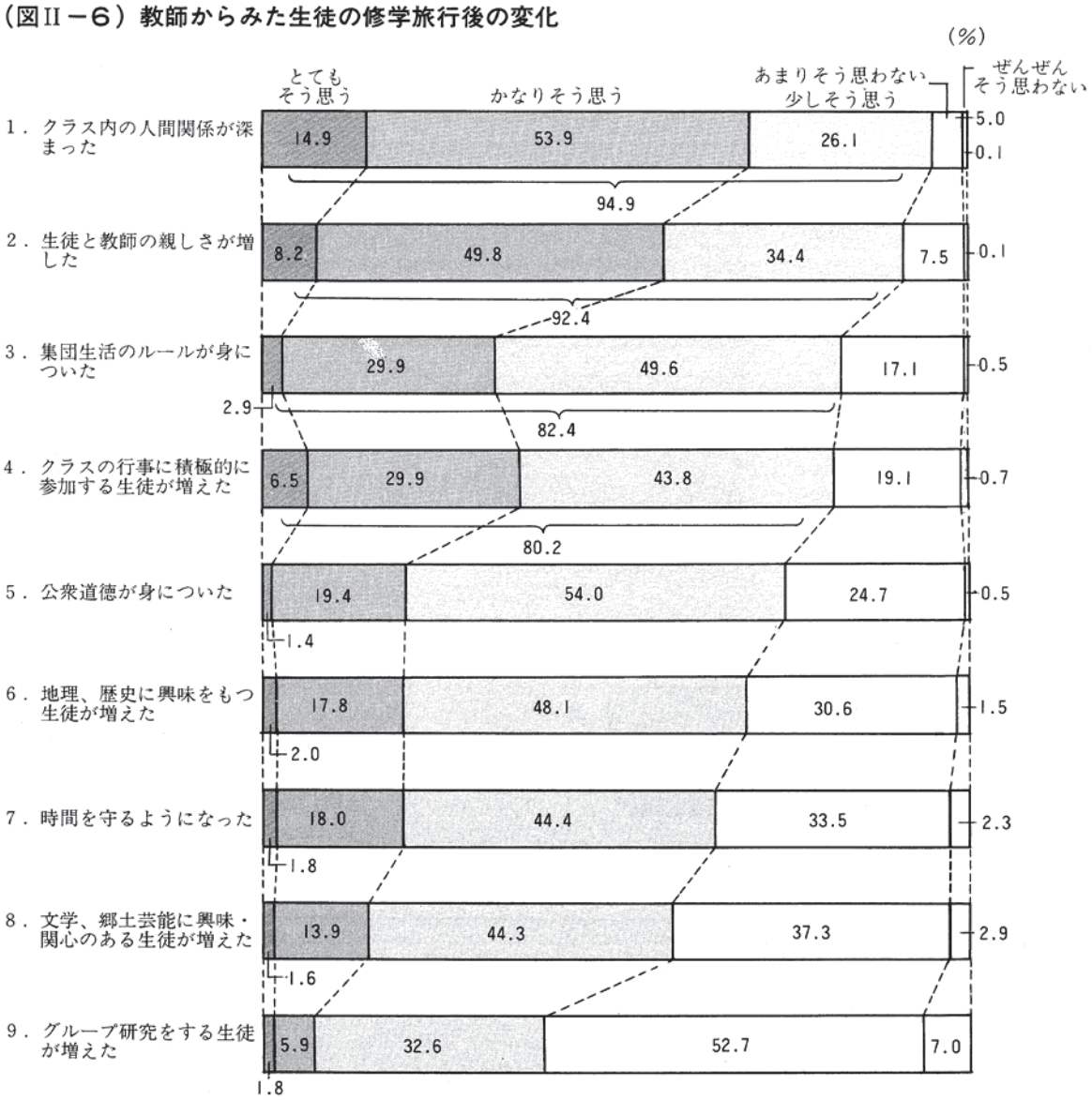
（図Ⅱ－５）修学旅行の目的×担任の有無



2）修学旅行を経験して

前述のような目的意識を持って、計画・実施された旅行を体験することは、生徒たちにどのような変化をもたらすのであろうか。図II－6は教師が感じる旅行後の生徒の変容である。全体的にみると「とてもそう思う」割合は少ないが、「とても・かなり・少しそう思

（図II－6）教師からみた生徒の修学旅行後の変化

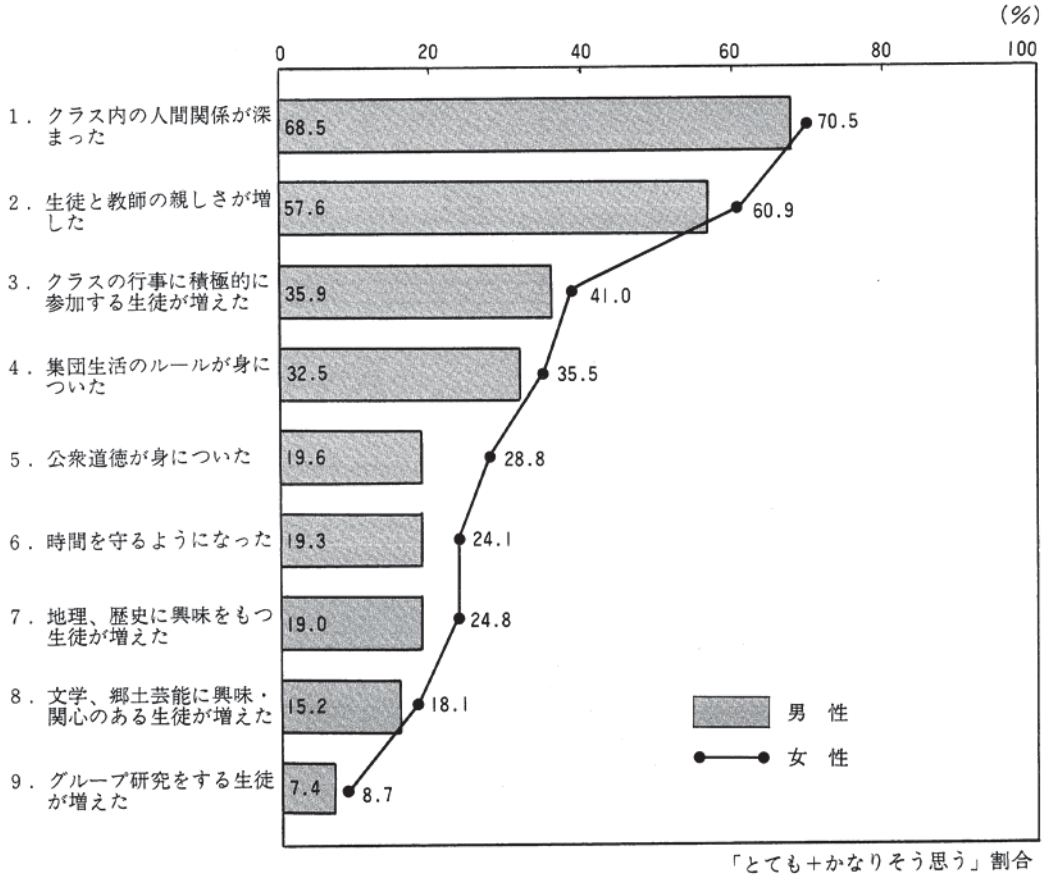


う」割合でみると、クラス内の人間関係が深まった(94.9%)、生徒と教師の親しさが増した(92.4%)、集団生活のルールが身についた(82.4%)、クラスの行事に積極的に参加する生徒が増えた(80.2%)の項目でよい評価がみられる。

さらに、生徒の変化を数値で追ってみることとしたい。**図II－7**の教師の性別では、女性教師のほうが生徒の変化をより認めており、修学旅行に対する期待が大きいようである。

図II－8は担任の有無による差をみたものである。担任外の教師は、クラス内の人間関

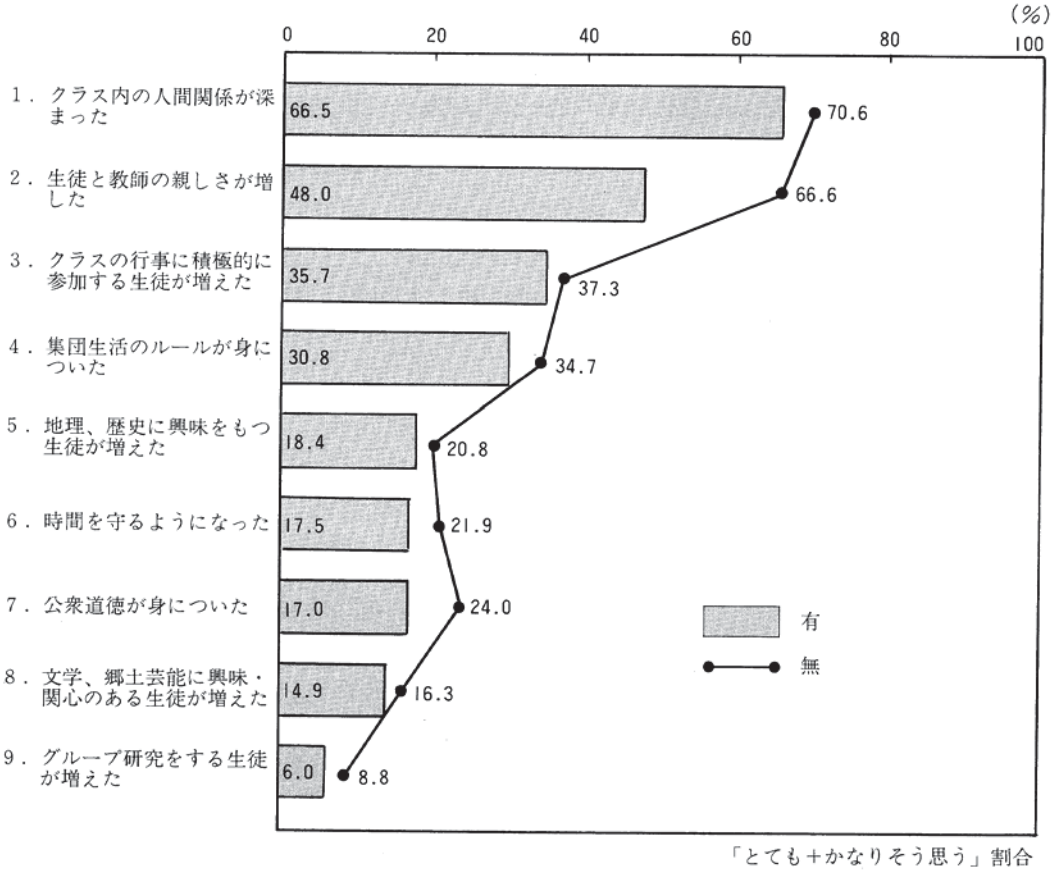
(図II－7) 教師からみた生徒の修学旅行後の変化×性別



係が深まった(70.6%)、生徒と教師の親しさが増した（66.6%)、公衆道徳が身についた（24.0%）などと、全般に担任の教師より高い数値を示している。日頃、授業のみのつき合いからはみられないお互いのよさを発見したのかもしれないし、授業以外での会話をもつ機会に多く恵まれたためかもしれない。

さらに**表II－8**で教師の経験年数から考えてみると、修学旅行を通し、各項目ともポジティブな変化を認めているのは21～30年、31年以上在職のいわゆるベテランといわれる教師集団に多いことがわかる。

（図II－8）教師からみた生徒の修学旅行後の変化×担任の有無



「とても＋かなりそう思う」割合

（表Ⅱ－８）教師からみた生徒の修学旅行後の変化×教職経験

（%）

	1～5年	6～10年	11～20年	21～30年	31年以上
クラス内の人間関係が深まった	61.1	67.8	72.1	68.1	70.4
生徒と教師の親しさが増した	45.5	44.2	59.2	60.4	72.6
集団生活のルールが身についた	35.1	30.0	29.1	33.7	38.0
クラスの行事に積極的に参加する生徒が増えた	31.2	37.4	40.7	33.8	57.3
公衆道徳が身についた	20.8	17.8	15.8	22.0	29.1
時間を守るようになった	18.2	19.7	17.3	21.8	20.4
文学、郷土芸能に興味・関心のある生徒が増えた	16.9	12.9	13.4	16.1	19.7
地理、歴史に興味をもつ生徒が増えた	15.6	16.3	17.7	23.1	21.8
グループ研究をする生徒が増えた	6.5	6.8	5.3	8.6	10.6

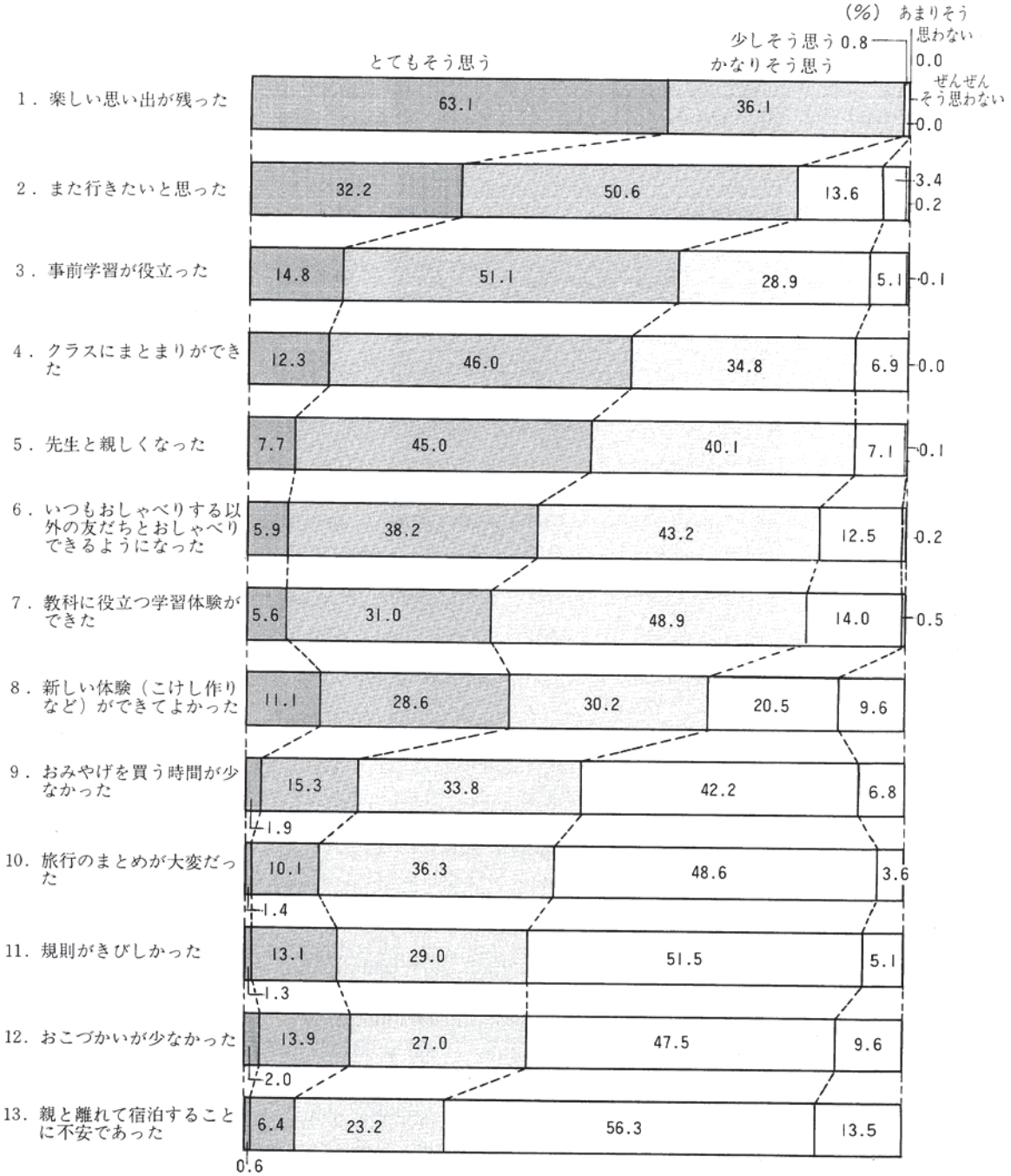
「とても＋かなりそう思う」割合

3）修学旅行の価値とは

以上のように修学旅行を通し、生徒の中に多くの効果的な変化が認められるとしている教師に、生徒にとって修学旅行とはどのような意味を持っているかたずねてみたのが、**図Ⅱ－9**である。楽しい思い出が残ったでは、「とても・かなり・少しそう思う」割合が100％である。以下、また行きたい、事前学習が役立った、クラスにまとまりができた、先生と親しくなったなどの項目では「とても・かなり・少しそう思う」割合が9割以上となっている。教師は中学生の修学旅行をかなり充実した時間を共にでき、かつ効果的な教育の場として考えているようである。

表Ⅱ－9では、これを教師の性別で示したものである。女性教師のほうが修学旅行をより教育的効果を上げる場と考えているようである。

（図Ⅱ－９）教師からみた生徒の修学旅行後の感想



（表Ⅱ－９）教師からみた生徒の修学旅行後の感想×性別

（%）

	男　性		女　性
楽しい思い出が残った	61.7	<	71.4
また行きたいと思った	30.4	<	45.2
事前学習が役立った	13.4	<	25.0
クラスにまとまりができた	10.9	<	21.9
新しい体験ができた(こけし作りなど)	10.4	<	16.5
先生と親しくなった	7.1	<	12.4
教科に役立つ学習体験ができた	5.2	<	8.6
いつもおしゃべりする以外の友だちができた	5.2	<	11.4
おこづかいが少なかった	2.1		1.0
おみやげを買う時間が少なかった	1.9		1.9
旅行のまとめが大変だった	1.3		1.9
規則がきびしかった	1.2		1.9
親と離れた宿泊に不安であった	0.7		0.0

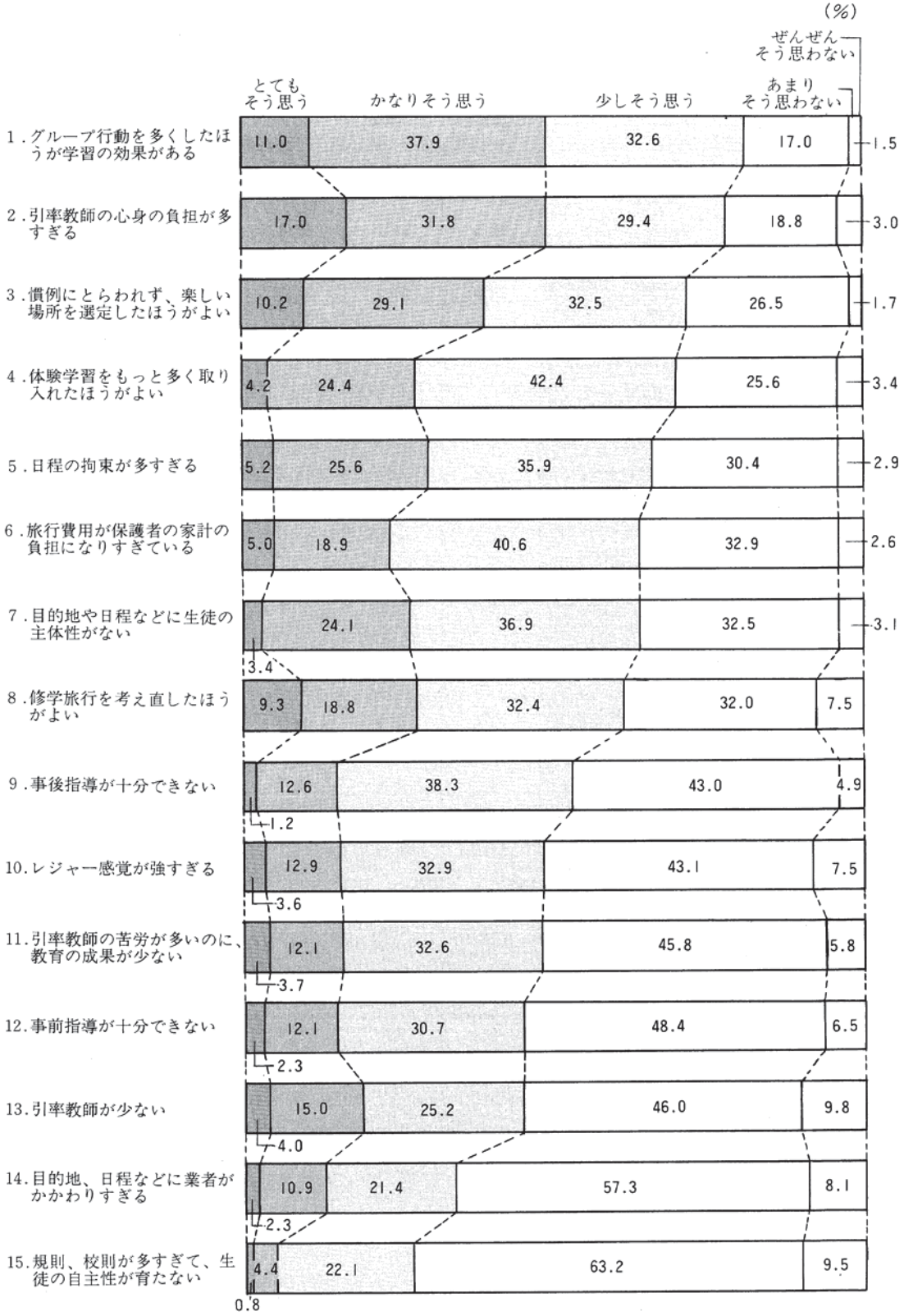
「とてもそう思う」割合

4）修学旅行を終えて

図Ⅱ－10は、平成元年度の修学旅行後の教師自身の感想である。項目別にみると、グループ行動、生徒の自主性の尊重、体験学習の取り入れ方、日程の拘束、目的地や日程への生徒の主体性をどうするかなどに、かなり不満や改善を望んでいるようである。また、引率教師の心身の負担について約８割もの教師が負担が多すぎると感じている。

さらに数値で追ってみよう。**表Ⅱ－10**は、教師の感想を教職経験別にみたものである。どの項目でも21～30年、31年以上の教師が不満や改善を望んでいることがわかる。引率教師の心身の負担についても、１～５年の教師では「とても・かなりそう思う」割合は27.3%にすぎない。一方、31年以上の教師では62.3%が負担を感じている。もちろん若さという体力の差もあるが、21年以上の教師は表Ⅱ－１で示したように、修学旅行の担当者になる場合が多く、事前の準備の大変さと現地での事故への対処、責任の重さから、精神的にも肉体的にも一段と疲労を感じることが多いのかもしれない。

（図Ⅱ－10）修学旅行後の教師の感想



（表Ⅱ－10）修学旅行後の教師の感想×教職経験

（%）

	1～5年	6～10年	11～20年	21～30年	31年以上
グループ行動を多くしたほうが学習の効果がある	45.5	53.1	49.8	45.1	53.2
慣例にとらわれず、楽しい場所を選定したほうがよい	35.5	44.9	37.1	35.9	45.5
目的地や日程などに生徒の主体性がない	28.6	19.7	26.5	29.2	32.9
引率教師の心身の負担が多すぎる	27.3	38.1	48.6	53.7	62.3
旅行費用が保護者の家計の負担になりすぎている	27.3	19.7	19.4	23.9	32.9
日程の拘束が多すぎる	26.0	24.0	31.9	35.1	30.8
事後指導が十分できない	25.6	10.2	11.4	17.0	13.3
体験学習をもっと多く取り入れたほうがよい	23.4	30.2	26.9	27.2	35.5
修学旅行を考え直したほうがよい	14.5	19.9	28.7	33.4	32.6
事前指導が十分できない	14.3	10.9	14.7	16.0	14.7
引率教師の苦労が多いのに、教育の成果が少ない	11.8	11.6	15.7	17.3	19.5
引率教師が少ない	13.0	16.5	20.8	17.7	24.6
レジャー感覚が強すぎる	11.7	10.2	13.2	19.8	23.8
目的地、日程などに業者がかかわりすぎる	6.5	8.8	12.8	15.9	16.8
規則、校則が多すぎて、生徒の自主性が育たない	5.2	4.8	4.7	5.3	6.3

「とても＋かなりそう思う」割合

5）修学旅行でのきまり

これまで述べたように、教師は中学生にとって修学旅行とは学校外の体験や学級集団の形成、教師と生徒の人間関係の確立の場として、また楽しい旅として高く評価している。こうした点について、さらに効果を高めるために、「集団のきまり」を作ることが常に行われている。しかし、この「きまり」をめぐり、指導する側の教師と指導される側の生徒の間には感情的対立が生じることもしばしばある。図II－10ですでにみたように、教師は、規則、校則が多すぎて、生徒の自主性が育たないと感じている割合は「とても・かなり・少しそう思う」を含めても27.3%にすぎない。では、具体的な項目をあげ、教師がどのように対応していくのかみてみたい。

表II－11は、教師が考える修学旅行に持っていくもので好ましくないものである。ファミコン（94.4%）、ポータブルテレビ（95.8%）、CDプレーヤー（91.3%）、ウォークマン(88.1%)、ラジカセ(85.5%)、ビデオ(84.7%)、ネグリジェ（88.2%）などは、好ましくないと考えられている。この「きまり」については教師の中でも人生観や生活経験によりさまざまな考えを持っている場合が多く、共通理解のもとに指導しにくいものである。

さらに数値を追ってみたい。**表II－12**は性別で示したものである。全体に女性教師のほうがより好ましくないと考えている。**表II－13**は、担任の有無である。担任は遊びを中心とした用具に、担任外は生活用品を中心により好ましくないと考えている。さらに、**表II－14**では教師の経験年数で示したものである。整髪剤、私服、ドライヤーは経験年数の多い教師が、マンガは1～5年の若い教師が好ましくないと考えている。考えてみれば、中・高校生の「朝シャン」は有名であるが、教師経験1～5年の先生も、「朝シャン」世代なのかもしれない。したがってドライヤー、整髪剤にはあまり抵抗を感じないのかもしれない。

では、好ましくないものに対する教師の指導はどのようにしているのであろうか。**表II－15**は、各項目別に教師の指導の方法を示したものである。全体的には、「すぐ提出させる」指導が最も多いようである。**図II－11**は性別で示したものである。女性教師は、すでにみたように好ましくないと考えている割合は高いが、「すぐ提出させる」割合では男性教師より低い数値を示している。**図II－12**は担任の有無である。担任では違反の制服、整髪剤、私服、ドライヤー、ネグリジェの項目で「すぐ提出させる」割合が担任外より低い数値を示している。担任と生徒の感情的対立の原因でもあるこれらの指導は、担任にとって「すぐ提出させる」だけの指導ではすまされないようなものがあるようでならない。**図II－13**は教職経験でみたものである。

次に、生徒と教師の対立・不信の原因にもなる「きまり」はどのように決められているのだろうか。**図II－14**は、修学旅行中のきまりの決め方を示したものである。先生と生徒の代表で決める(46.2%)、先生が決める(31.2%）と、どちらかといえば教師中心で決められている傾向にある。生徒が話し合って決める場合、実行委員などの組織を作っている学校もあるようである。一方、きまりがないのは全体の0.5%にすぎず、教師にとって、まだまだ生徒に「きまり」は必要と考えられているようである。

以上みてきた中では、まだまだ伝統的な修学旅行のイメージが強いようであるが、教師の感想の中でも示されていたように、体験学習、グループ行動、自主見学などさまざまな角度から、新しい修学旅行の形を探っているときのように思える（**図II－15**）。

(表II－11) 修学旅行に持っていくもので好ましくないもの

(%)

読書	マンガ	66.3
	雑　誌	50.7
	小　説	30.3
ゲーム類	ファミコン	94.4
	花　札	72.0
	ゲーム類	47.5
	トランプ	7.4
音響関係	ポータブルテレビ	95.8
	ＣＤプレーヤー	91.3
	ウォークマン	88.1
	ラジカセ	85.5
	ビデオ	84.7
生活用品	ネグリジェ	88.2
	整髪剤	71.3
	私　服	70.4
	ドライヤー	57.5
	パジャマ	45.4
	カメラ	8.1

（表Ⅱ－12）修学旅行に持っていくもので好ましくないもの×性別

（%）

	男　性	女　性
ポータブルテレビ	95.5	98.1
ウォークマン	87.5	91.4
花　札	71.4	76.2
マンガ	65.4	72.4
ネグリジェ	87.5	92.4
整髪剤	71.0	72.4
私　服	70.6	67.6
ドライヤー	58.1	52.4

（表Ⅱ－13）修学旅行に持っていくもので好ましくないもの×担任の有無

（%）

	有	無
ポータブルテレビ	96.4	95.3
ウォークマン	89.9	86.5
花　札	68.3	75.1
マンガ	76.9	57.7
ネグリジェ	87.5	88.6
整髪剤	69.1	72.9
私　服	66.5	73.2
ドライヤー	50.1	63.4

(表II－14) 修学旅行に持っていくもので好ましくないもの×教職経験

(%)

	1～5年	6～10年	11～20年	21～30年	31年以上
ポータブルテレビ	97.4	97.3	97.6	94.4	93.8
ウォークマン	88.3	89.7	90.6	85.6	87.6
花　札	71.4	67.8	67.0	73.9	80.0
マンガ	83.1	82.2	76.4	55.6	47.6
ネグリジェ	90.9	89.7	88.7	86.3	88.3
整髪剤	68.8	71.2	68.9	70.1	78.6
私　服	64.9	67.8	70.3	72.2	72.4
ドライヤー	39.0	49.3	54.2	60.6	74.5

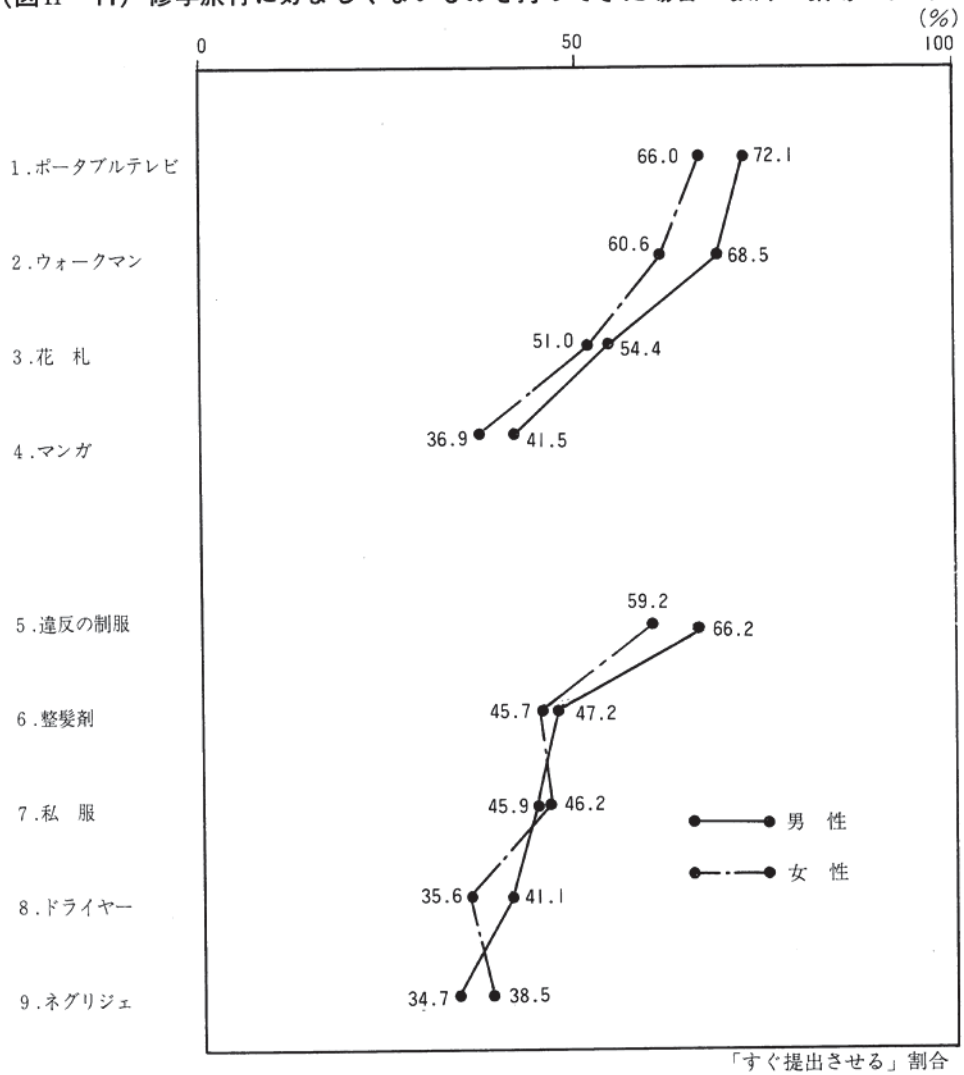
◯＝最大値
——＝最小値

（表Ⅱ－15）生徒の持ち物に対する教師の指導

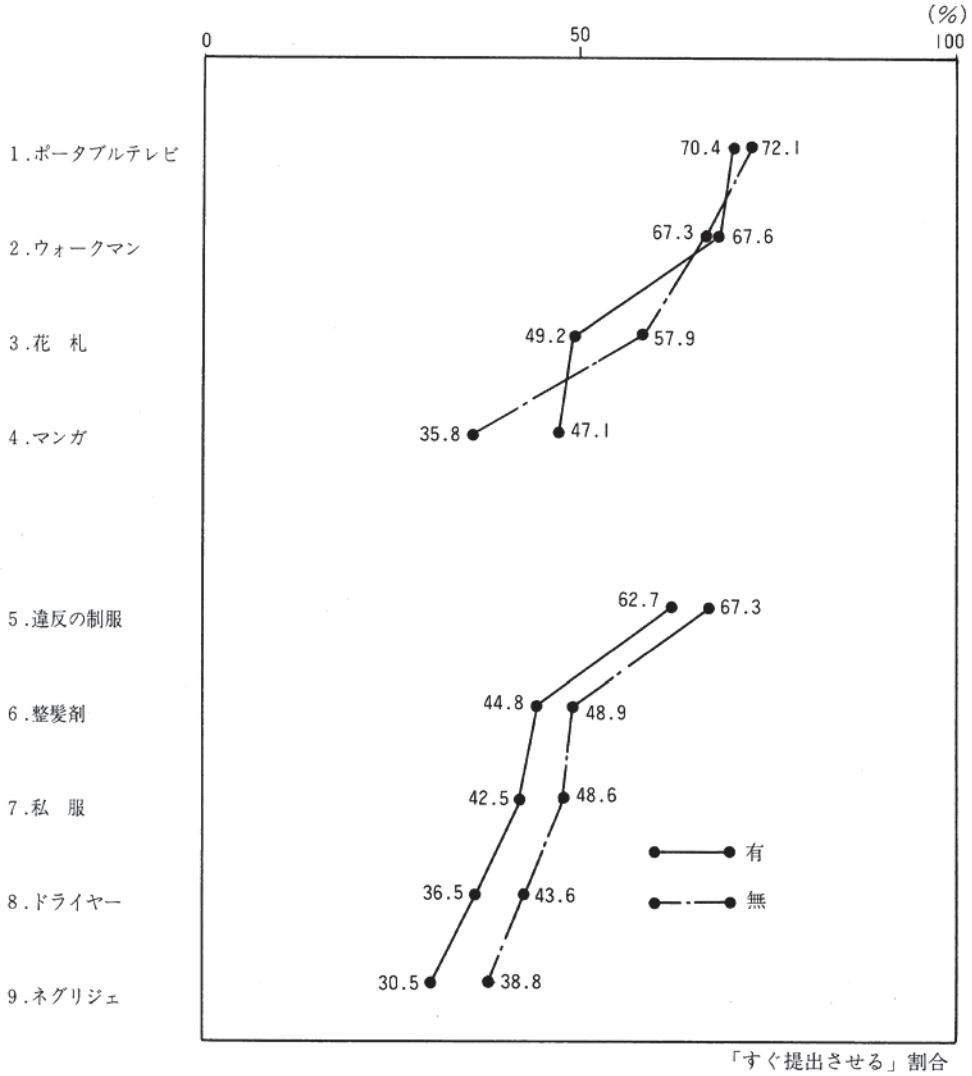
（%）

	すぐ提出させる	目的地で提出させる	注意して本人に持たせておく	注意しない	禁止していない
ポータブルテレビ	71.3	12.2	15.2	0.1	1.2
ビデオ	69.6	11.0	13.9	0.6	4.9
ウォークマン	67.4	11.6	17.7	0.6	2.7
花　札	54.0	9.0	17.2	5.1	14.7
マンガ	40.8	8.0	29.3	5.5	16.4
違反の制服	65.3	11.7	21.8	0.1	1.1
整髪剤	47.0	13.6	26.2	2.4	10.8
私　服	45.6	9.7	34.3	1.0	9.4
ドライヤー	40.3	13.2	21.4	2.7	22.4
ネグリジェ	35.0	11.7	45.5	2.4	5.4
パジャマ	25.4	8.2	37.5	4.8	24.1
時　計	7.7	0.9	10.6	4.0	76.8
決められた以上のおこづかい	30.6	12.2	49.6	5.6	2.0

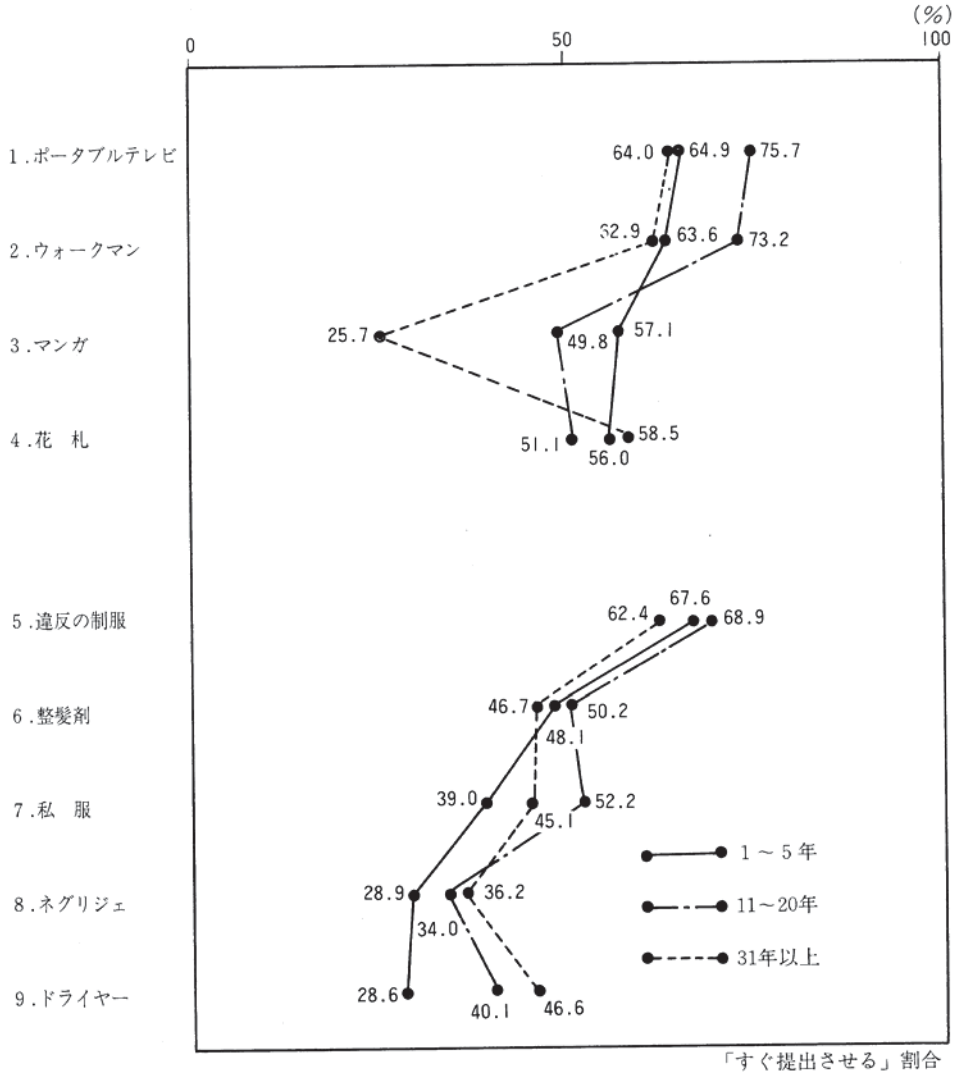
（図Ⅱ－11）修学旅行に好ましくないものを持ってきた場合の教師の指導×性別



（図II－12）修学旅行に好ましくないものを持ってきた場合の教師の指導×担任の有無

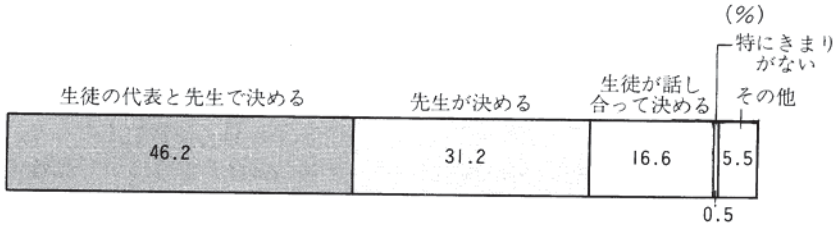


（図II－13）修学旅行に好ましくないものを持ってきた場合の教師の指導×教職経験

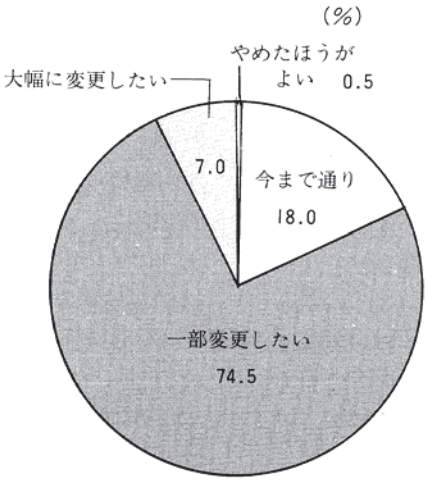


「すぐ提出させる」割合

（図Ⅱ－14）修学旅行中のきまりの決め方



（図Ⅱ－15）次回の計画について



3．体験学習と自主見学

明治以来、わが国の学校教育のなかで親しまれてきた修学旅行だが、戦後も順調に復活、充実の途を歩んでいる。しかし、昭和50年代に入るころから目的地の多様化の傾向が指摘されるようになり、内容や目的の点でも新しい工夫がみられるようになってきた。その契機となったのは、昭和52年の学習指導要領改訂で「勤労体験学習」の重視が強調されたことでもあったろう。大都市の子どもが農家に泊まり込んで実習を体験する例などが代表的なものだが、この他にもスキー修学旅行などが比較的多く実施され、話題になっている。スケジュールの一部を陶芸や登山、民芸品作りなどに割く学校を含めると、後述するようにその例はかなり多い。体験学習とまでいかなくとも、グループ別の自主見学をスケジュールの一部に組み込む形で旧来の修学旅行のパターンに変化をもたせる学校は、むしろ多数派になっている。ここでは、こうした修学旅行の新しい流れの現状と、修学旅行の企画、立案にかかわる教師たちの意識を教師対象の調査結果をもとに探っていきたい。

1）体験学習3割、自主見学7割

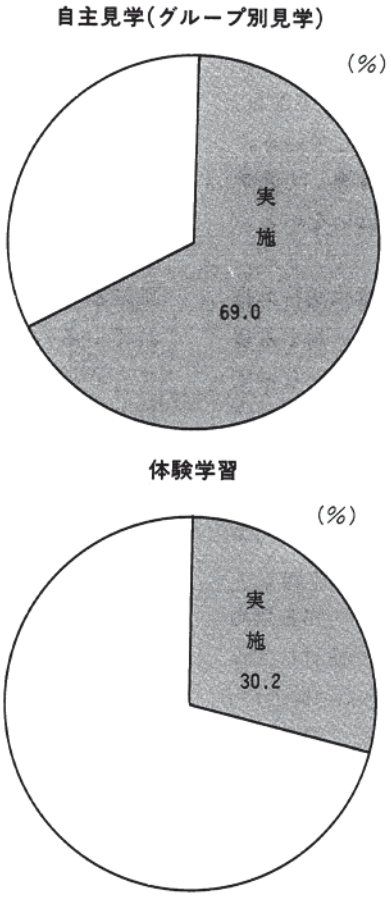
はじめに、修学旅行のなかで体験学習を実施したかどうか、グループ別の自主見学を実施したかどうかをたずねてみた。まず体験学習についてみると、実施したのは全体の3割ほど、実施しなかったのは7割ほどである（**図II－16**）。現状からいえば、体験学習の実施校は多数派ではない。自由記述欄の回答で実施された体験学習の具体的な内容をみると、清水焼の絵つけ、スキー、地引き網、友禅染、座禅や一日雲水、平和学習、登山など、なかなか多岐にわたっている。

一方、グループ別の自主見学の実施状況をたずねると、こちらは逆に実施が7割弱、実施しなかったのは調査対象の3割強にすぎない。具体的には、東京周辺では東京ディズニーランド、東京都内、鎌倉市内など、京阪神では京都市内、奈良市内、奈良公園といった回答が多く、その他の地域では広島市内、長崎市内、札幌市内といった回答が目立った。

実施しなかった学校にその理由をたずねてみると「日程的に無理」「2泊3日で見学が多く、移動の時間が得られなかった」などのスケジュールの過密をあげる学校が多く、「最初計画したのだが、周囲の学校に前例がないので、職員の共通理解が得られなかった」「業者に依頼し、その日程にしたがって全体行動したので」「団体旅行のため」といった理由をあげた学校もみられた。このあたりに問題があるといえそうだが、「地理に詳しくなく今年度は見送ったが、次年度から実施」「近々実施予定、半日程度を計画中」と実施へ向けて動いている学校の現状を伝えた回答も少なくない。

日本修学旅行協会の資料によると、中学校の場合、体験学習の実施率は全国平均で昭和59年度12.3%、61年度17.1%、63年度20.7%と漸増の傾向を示し、自主見学の実施率も45.4%（59年度）、50.9%（61年度）、63.5%（63年度）と着実に増加している（日本修学旅行協会「修学旅行のすべて」1990年版）。体験学習にせよ、自主見学にせよ、過密なスケジュールのなかで配分される時間は多くない例がほとんどではあるが、修学旅行の新しい流れとして着実に根づきつつあるといえそうである。

（図Ⅱ－16）自主見学・体験学習の実施率



2）教師たちの評価

「観光バスツアー」というべき在来型の修学旅行からの脱却を目ざす体験学習と自主見学は年度を追って広がりつつあり、グループ別の自主見学は実施する学校が多数派になっている。とはいえ、体験学習の実施率はすでに述べた通り３割ほどにすぎないから、７割の中学校はプログラムへの導入に踏みきってはいない。グループ別の自主見学の場合にも、３割ほどの中学校は実施に至ってはいないわけである。では、直接の修学旅行の立案者である教師たちは、体験学習やグループ別自主見学をどう評価しているのか。

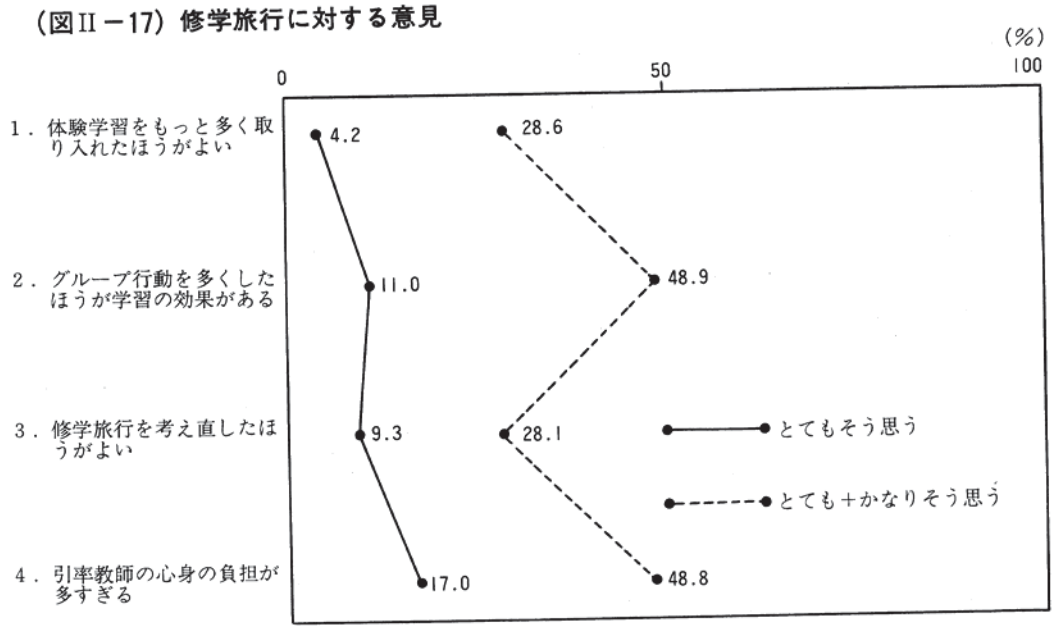
まず、修学旅行後に体験学習とグループ行動についての評価をたずねてみると、図Ⅱ－17に示すように、「体験学習をもっと多く取り入れたほうがよい」という意見に対して「とてもそう思う」「かなりそう思う」と積極的に賛成したのは、合わせて調査対象の教師の28.6%でしかなく、「グループ行動を多くしたほうが学習の効果がある」という意見に対する積極的な肯定も48.9%にとどまっている。２つの項目を比較するとグループ別の自主見学に対する評価が高いが、それでもプログラムへの導入に積極的なのは半数弱であり、体

験学習の場合には、これをプログラムに取り入れることを積極的に肯定する教師はむしろ少数派である。また「修学旅行を考え直したほうがよい」という項目に対する賛成者の割合を調べてみても、「とてもそう思う」9.3%、「かなりそう思う」18.8%で合計28.1%でしかない。「引率教師の心身の負担が多すぎる」との項目が同じ基準で48.8%に達していることが目につくものの、教師たちは概して修学旅行の現状をさほど問題視してはいないといえる結果である。

また、**表II－16**、**図II－18**は修学旅行の目的についての代表的な意見7項目に対する賛否を5段階で評定してもらった結果となっている。これをみると、「日頃の学校生活ではできないことを体験するよい機会」が修学旅行だとする意見に対する賛成が多い。当然といえば当然の結果であるが、ここで「日頃の学校では体験できないが修学旅行で体験しうる」とされることの中身をうかがい知るために他の項目に対する賛否を併せて検討してみると、「教科の学習を体験化するよい機会だ」とする意見に対する肯定率は低く、「自然の大きさ、美しさにふれるよい機会」「公衆道徳を養うよい機会」「教師と生徒がふれ合うよい機会」だとする回答もそれぞれさほど高くはない。「学校生活でできないことを体験するよい機会だ」とする項目に続くのは、「集団生活のルールを身につけるよい機会」だとする回答や「生徒どうしの友情を培うよい機会」だとする回答なのである。つまりこの結果から読みとれるのは、教師たちは修学旅行を集団宿泊的行事ないし集団宿泊訓練として位置づける傾向が強いということではなかろうか。

実は中学校で平成5年度から実施される新学習指導要領では、修学旅行は従来通り「特別活動」のなかの「学校行事」に位置づけられているのだが、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことが目的とされて、集団への所属感を養うことが強調されている。今回の調査結果からみると、修学旅行についての教師の側の意識も、おおよそこのような位置づけに対応しているといえそうである。

（図II－17）修学旅行に対する意見

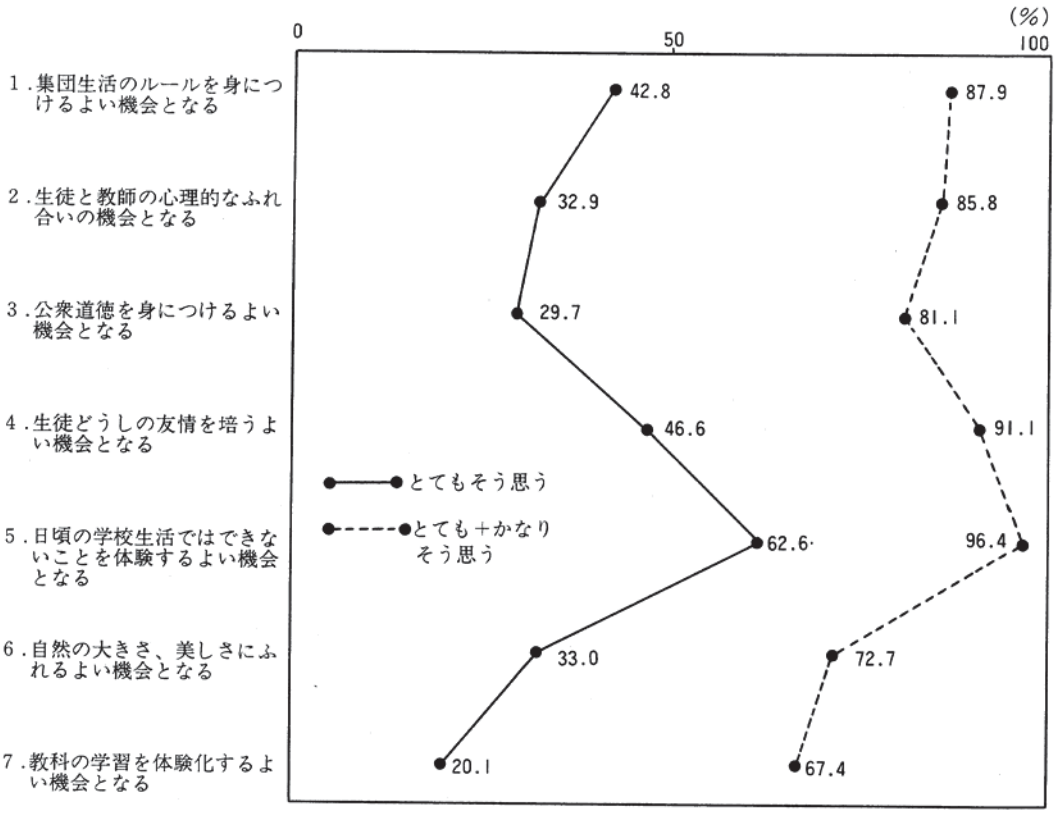


（表Ⅱ－16）修学旅行の目的についての意見

（%）

	とても そう思う	かなり そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
集団生活のルールを身につけるよい機会となる	42.8	45.1	10.0	2.1	0.0
生徒と教師の心理的なふれ合いの機会となる	32.9	52.9	11.9	2.2	0.1
公衆道徳を身につけるよい機会となる	29.7	51.4	15.8	3.1	0.0
生徒どうしの友情を培うよい機会となる	46.6	44.5	7.9	1.0	0.0
日頃の学校生活ではできなことを体験するよい機会となる	62.6	33.8	3.0	0.6	0.0
自然の大きさ、美しさにふれるよい機会となる	33.0	39.7	21.6	5.1	0.6
教科の学習を体験化するよい機会となる	20.1	47.3	25.4	7.0	0.2

（図Ⅱ－18）修学旅行の目的についての意見

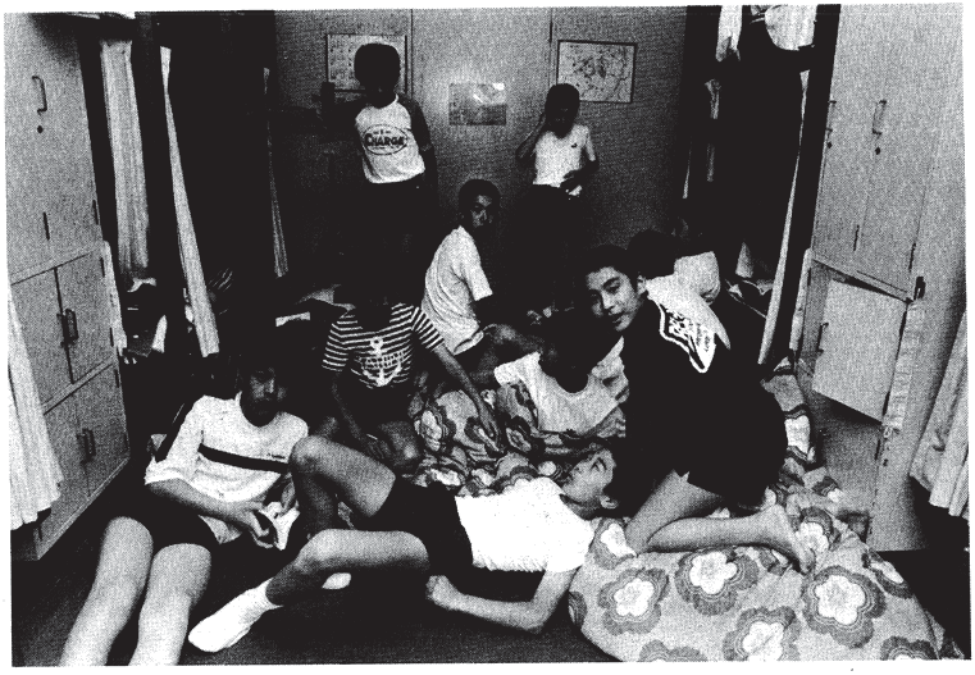


3）体験学習の重視も必要

ただ、ここで気になるのは「自然の大きさ、美しさにふれるよい機会になる」とか「教科の学習を体験化するよい機会となる」という項目への教師たちの賛成率が低いこと。地域差や学校規模との関連は当然あろうが、とくに都会の学校の場合、「自然教室」などの授業との修学旅行のかかわりや日常の学習活動と修学旅行の結びつきがもう少し強く志向されてもよいのではなかろうか。学習はあくまで教室でペーパーメディア中心に行い、修学旅行は集団宿泊体験として位置づけるという割り切り方でよいのか、考えるべき余地はあろう。

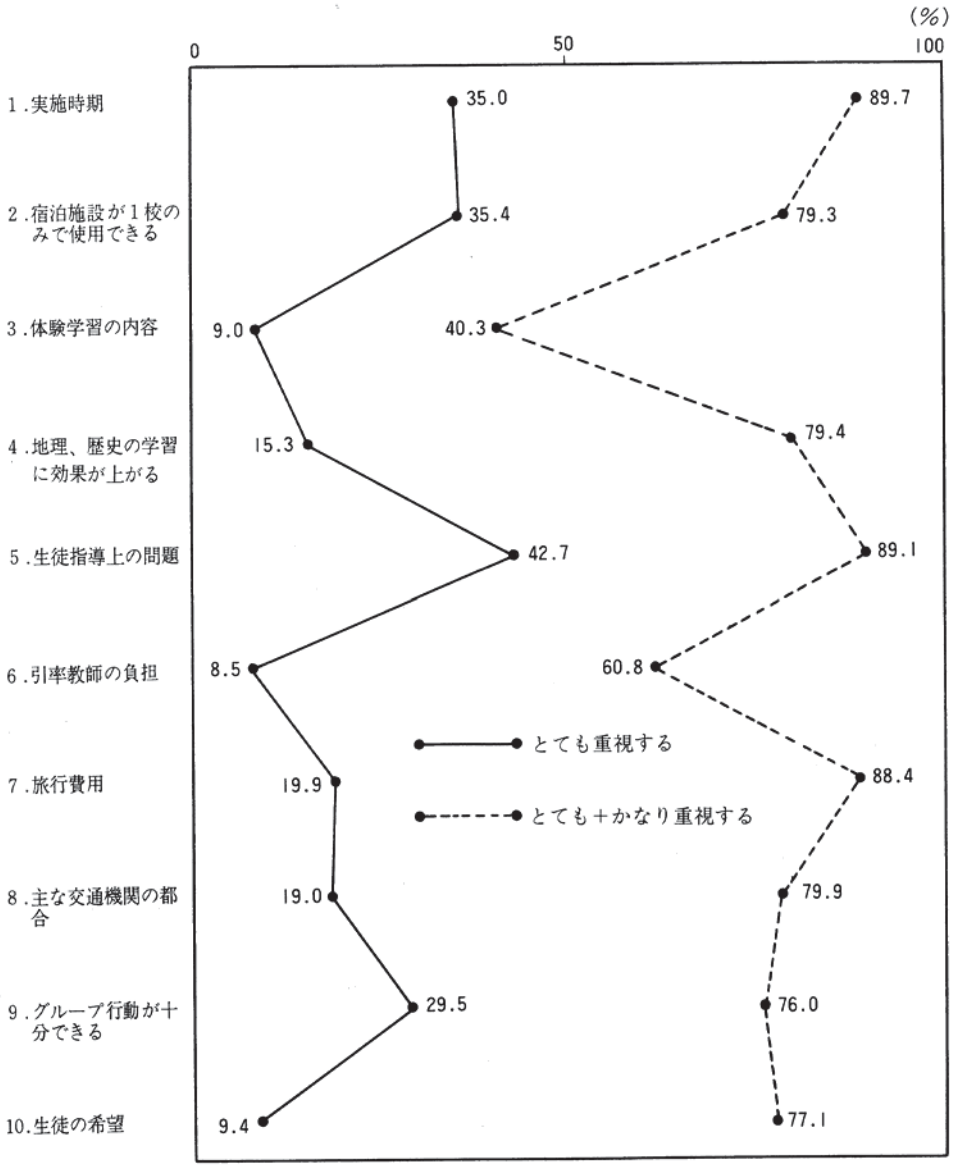
一方、修学旅行計画の立案にあたってどんな点を考慮に入れているかをたずねた結果では（**表II－17**、**図II－19**）、生徒指導上の問題が断トツという結果がみられる。「とても重視する」条件としてあげられた項目は、「生徒指導上の問題」が42.7％であり、それに続くのが「宿泊施設が１校のみで使用できること」の35.4％、「実施時期」の35.0％となっている。宿泊施設を独占して利用したいというのも結局は生徒指導上の配慮にちがいないから、生徒指導面の配慮に手一杯で修学旅行の積極的な意味づけには手がまわりかねるのが現状といえようか。そして、逆に修学旅行の立案で重視しない条件をみると、表II－17をみた通り「体験学習の内容」を「あまり重視しない」とする回答が47.3％で最も多い。

集団宿泊体験の重要性は否定しないが、それだけならば近場の青少年教育施設の利用も考えられよう。近年、ものについての知識はきわめて多いにもかかわらず、ものそのものの知識はきわめて乏しい「シミュレーション世代」の子どもの体験の希薄さが問題にされている。従来、学校教育が暗黙のうちに基盤としてきた児童・生徒の直接体験を学校教育に意図的に取り込んで再生することが要請されるのであり、この点からいうと現実の生活指導面の要求に対処するとともに、体験学習という方向での新しい修学旅行のあり方を志向することが求められるといえるだろう。



（表II－17）計画をたてるとき考慮する条件

（%）

	とても重視する	かなり重視する	あまり重視しない	ぜんぜん重視しない
実施時期	35.0	54.7	8.6	1.7
宿泊施設が1校のみで使用できる	35.4	43.9	19.1	1.6
体験学習の内容	9.0	31.3	47.3	12.4
地理、歴史の学習に効果が上がる	15.3	64.1	19.9	0.7
生徒指導上の問題	42.7	46.4	10.3	0.6
引率教師の負担	8.5	52.3	37.1	2.1
旅行費用	19.9	68.5	11.6	0.0
主な交通機関の都合	19.0	60.9	18.7	1.4
グループ行動が十分できる	29.5	46.5	22.1	1.9
生徒の希望	9.4	67.7	22.0	0.9

(図II－19) 計画をたてるとき考慮する条件